

次世代モビリティシンポジウム パネルディスカッション視聴要旨

令和2年12月26日

あかしあ台小校区まち協

【パネラー所見：パネラーの名前・所属と発表テーマのみを記載】

- ① 植木氏：経済産業省における自動運転/MaaSの推進に向けた取組み
経済産業省 ITS・自動走行推進室
- ② 多田氏：国土交通省における自動運転の実現に向けた取組み
国土交通省 自動車局技術・環境政策課
- ③ 高寺女史：三田市の交通の現状と最近の取組み
三田市交通まちづくり課
- ④ 須和氏：次世代モビリティの実現に向けた神姫バスの取組
神姫バス 次世代モビリティ推進室
- ⑤ 楠田女史：心豊かな暮らしと社会のために暮らしの視点から移動と移動手段を考える
モビリティジャーナリスト

【ここから意見交換、発言要旨を記載】

吉田座長：短期的テーマとしては、移動の課題の解決、自動運転や Maas がどう役に立つか、ここをこう変えればもう少し役立つというところ。長期的テーマとしては、都市・三田のまち・暮らしの豊かさを高めるのにどう出来るのかといったところ。

二つのフェーズから考えたい。

まず、短期的テーマである移動の課題の解決に関して、次世代モビリティサービスがどう活きるのか、楠田さんからコメントをお願いします。

楠田女史（フリージャーナリスト）：現在は、暮らしの課題の解決をデジタルで解決する時代。いろんなツールがある。その1つが自動運転。その他、バスでもないタクシーでもない移動手段とか、グリーンスローモビリティのようなものとか、車いすとか、病院とつなぐ移動サービスで新たな価値を創造するとか、他の分野との連携によるものとかがある。

座長：二つの方向性が示された。1つはバスでもないタクシーでもない自家用有償運送と組み合わせた移動手段の導入。三田でも取り組もうとされている。もう1つは、移動以外の目的とどう結びつけるかということ。経済産業省からの構想（スマートモビリティチャレンジ）でも示された。

それでは、三田の取組、自家用有償運送について、どういう風に展開するのか、課題・不安は何か、高寺さんお願いします。

高寺女史（三田市）：バスはバスで残したい思い強い。しかし、うまく使えていない状況がある。その中で、人の移動と公共交通を結びつける為、自宅～バス停～目的地への移動にバスでもないタクシーでもないもの、三田市としては自家用有償運送に取り組もうとしている。地域みんなが助け合って支え合って送迎する、乗せてあげる、そういう取り組み・精

神が根付いている地域が多いことに着目して、もともとの地域力を活かすことからスタートした。地域の実情に応じて車両、運用、料金を柔軟に選べる仕組みを考えている。課題の1つは地域力としてのドライバーの確保、もう1つは新しくなじみがないこととこれに加えてバスへの乗換えの手間も増えるということ。如何になれて頂いて、これはなかなか便利と感じてもらえるようにしたいと考えている。そのためにもバス事業者に協力して頂く。いろいろなサービスを良くする、そして、スムーズに乗り換えられるように時間を合わせて頂くとかが不可欠と考えている。

座長 三田はニュータウンもある、農村もある、既成市街地もある。どこの導入ポテンシャルが高かったか。

高寺 長らく交通不便地であった農村地域で最もポテンシャルが高かった。従来からのコミュニティもしっかりしていた。

座長：地方の移動が困っているのは、中山間地だという話をよく聞く。実は地域力が残っている。10年はまだいけるとも。この考え方は手法の打ち手が分かり易い。一方、ニュータウンが高齢化したらどうなるか、人が多いつながりが薄いところもある。意外とそういうところで自動運転やMaasが助けになるかもしれないのではないか。

座長 これまでの話を聞いて、植木さんはどのような印象を持たれたか。

植木氏 移動の課題は供給側と需要者側の2面がある。供給側の課題はドライバーの人手不足。需要者側の課題は高齢化に伴う免許返納。その中で、自動運転やMaasの活用が解決につながられるのではないか検討している。

先に手段と目的の話があった。手段については路線バスが維持できなくなっている中で自家用有償運送を活用するといったことが出てきている。又、既存の郵便配達員、過疎地でも配送を続けている。貨客混載。配達との連携もあるのではないかと。移動のリソースをうまく使うことが有効。

次に目的に関して。移動には目的がある。目的を踏まえて誰がどこに行くか、データを集めオンデマンドを始めとした効率的な移動につなげていけることがある。商業地の場合、スポンサーになってもらって費用を負担して頂くこともある。移動だけだと採算取れない。目的から考えると具体的な改善策も見えてくるのではないかと。

座長：目的との連携、人以外の物との掛け持ちの話。長野県で人と物との掛け持ちに関わっている。自家用有償運送、いくらまでならお金出せるか、安いほど良いという答えしか返ってこない。物と人を連携すると解決策が見つかることがある。地方では物をベースとして人を運ぶ考え方があっても良い。

では次に、車両の保安とか現場の経験の視点とかから、多田さん如何ですか。

多田氏（国土交通省）：どの地域でどのモビリティが適切かは難しいと感じた。実証試験をやってみて見えてくるところがある。この地域には自動運転には多大過ぎる、自家用有償運送でソフト面の補完手段をするのが良いと言った良い手段が見えてきた1つのきっかけになったと聞いたことがある。

自動運転の普及に社会的受容性が必要である。神姫バスの実証試験、乗車前の不安が40%から乗車後16%に減った。ユーザの変化を待つことなくショーケースとかモデルとか市場化を通じて社会的受容性を構築していくことが重要と思う。

又、自動運転車が駅前を走るようになった時、自動運転前に自動運転の技術の限界をPRすることによって路上駐車がなくなり既存の車も走りやすくなった、そして地域の交通の改善にもつながったということを知ったことがある。

座長：都市形成に係る第2フェーズにテーマがうまい具合に移ってきている。私が関わった取り組みで武蔵野市のムーバスがある。細い道路に自動運転バスを走らせる。路上駐輪が減った。新たなモビリティの導入で道路の使い方が変わる。地域の反応が違う。やってみて初めて分かることがある。良い変化を逃さないことが大切である。

次に、神姫バスさんから、自動運転の手ごたえについて、如何だったでしょうか

諏方氏（神姫バス）：3年掛かって今に来た。やってみないとわからないことがある。これまでは、自動運転のソフトわからなかった。今は移行できた。責任感も増してきたし限界も分かるようになってきた。徐々に経験値を積み重ねられた。

座長：明日からやってくれと事業者から言われてやられたということだが、何か特に大変だったことってあったか

須和氏：遠隔監視している。通信の途絶えとか予期せぬトラブル時にどうするかなどに苦労した。通信の大切さを改めて感じた。

座長：通信が不安定のときにいろんな課題があるということか。

須和氏：樹木の関係もあり道路の8割にあたる場所に3500個の磁気マーカー付けた点は良かった。しかし、バスの監視をバスロケーションシステムで行ったが、ここの通信でトラブルがあった。このことを利用者にどう伝えられるかということにも影響がでると感じている。

座長：バスロケーションシステムだと、利用者にも影響する情報とのタイムラグがあるところがある。今回は、そういうところも確認されたということですね。一般の路線のサービス設定にも活かされますね。

座長：では、残り5分程になりました。最後に、次世代モビリティを都市やまち及び地域暮らしの改善にどのようにつなげていくかについて期待をお話し頂きます。

先ず多田さん。

多田氏：どういう風に技術を使うか。地域の実情を踏まえて対応して欲しい。自動運転は、開発→実運転、そういう段階に来ていると感じた。車両の安全の問題、お困りの事あれば相談にきて欲しい。

植木さん：欧州は進んでいる。日本ではモビリティを通じたまちづくりが進んでいない。いろんな利害関係者が居るが、ビジョンを共有しながら取り組んで欲しい。時間がかかるが大切なことだ。

座長：次に、楠田さんお願いします。

楠田女史：Maas や自動運転が注目されることはうれしいことだ。移動に対して興味のない地域が多かった。これに対して、大きなメーカ、民間企業 国が投資して考えるようになってきている。又、コロナ禍で移動が止まると経済も止まる。外に出られないことはこんなに大変なことか、常にテレワークはつまらない。リアルがあってこそその生活の豊かさであることを再認識した。上手くお出かけを楽しむ、又、経済活動をする。地域経済で考える発想・取り組みが大切だ。運賃収入だけではうまくいかない、そこを打開できる。介護・福祉は予算を積み重ねていく。1人で移動できるようにする予算を付けて欲しい。一人一人が車に一生乗り続けられない社会であることをとらえて備えて年をとることをしっかり意識して暮らすことが必要と考える。

座長：では、須和さん如何でしょうか。

須和氏：モビリティ視点で考えると事業者は利用者に押し付けていないかということが気になる。如何に同意形成を図るか。最終的に使うのは利用者。利用者目線を忘れることなくまちづくり・地域づくりの視点で取り組みたい。

三田市とスマートモビリティ協定を結んだ(12月17日)、機関車の役目を果たしたい。

座長：最後に高寺さんお願いします。決意表明もどうぞ。

高寺女史：いろんな議論を聞かせて頂いてとても良かった。皆さんからのご指摘にもあるようにまちづくりを見据えて取り組みたい。とりわけ、交通を通じたまちづくりは足元を強くすることが大切であることを実感している。足元を固める取り組みに力を入れる。そして、三田ならではの Maas を目指していきたい。

座長：目指すべき姿は選ばれるまち。こんないいところと誇りに思えるまち。低炭素や社会包摂とか。その1つが次世代モビリティサービスだ。こんな良いものがあるから導入しようという視点だと今までと同じ。社会的経済的ハードルをどう超えるかが重要だ。意外と実証試験などの見せ方をすると使ってもらえることがある。とりわけ **Maas** は使ってみて初めて分かるところがある。三田に馴染む交通をつくることが宿題である。自慢できるようなまちづくりに関わっていきたい。